

## 笠居郷の古墳

香川大学 助教授 丹 羽 佑 一

律令期に笠居郷とされた地域には、古墳時代前期（4世紀）に、横立山経塚<sup>①</sup>、原経塚古墳、かしが谷2号墳、中期前半（5世紀前半）に、今岡古墳<sup>②</sup>が築造されるが、中期後半（5世紀後半）に属するものは現在不明であり、約100年以上の空白期間の後、後期後半（6世紀後半）に神高古墳群<sup>③</sup>等の横穴式石室墳群が突如として出現する。

しかし、この様な古墳群の変遷は、神高古墳群を除いて、各墳の明確な時期区分に基づいているものではなく、各々への不十分な情報と他地域の古墳群の展開を参考に想定したものである。各墳の年代には約50年の幅があり、25年単位の現在の研究レベルには程遠い精度である。したがって、この編年による当地域古墳群の展開は、当然ながら非常に不十分なものであり、多くの重要な変化を見落としたものになることが予想される。しかし、それでもなお、ここで当地域の古墳群の展開を進め様とするのは、かしが谷2・3号墳の発掘調査の成果によって、それを幾分か発展させられるのではないかという希望と、かしが谷2・3号墳自身の性格を明らかにする為にはそれが必要不可欠の手続であるという確信を抱くからである。

本地域の最古の古墳は、五色台の東麓或いは、勝賀山の西麓にあって、生島湾を見下ろす横山立経塚と原経塚両古墳と推測される。それは共に積石塚であり、他地域の積石塚が遅くとも中期前半には築造されなくなる状況を第1の根拠にしている。原経塚は積石塚という以外の情報はないが、横立山経塚の他の情報は上述の推測を助けるものである。

横立山経塚は全長37mの前方後円形を呈し、後円部に長軸を東西方向にとる、長さ約5m、幅0.8～1m、高さ0.9～1.1mの県下にあって長大な部類に入る堅穴式石室を設け、後円部からは器材埴輪片（形象不明）、円筒埴輪片（川西編年畿内Ⅱ期に相当<sup>④</sup>）を出す。又、後円部積石、前方部盛土という特殊な墳丘構築法をとる。県下の他墳と比較すると、坂出市の爺ヶ松古墳<sup>⑤</sup>に似るが、埴輪を出土する点で大きく異なっている。しかし、積石塚で埴輪を出土するものは少なく、東隣の石清尾山積石塚古墳群<sup>⑥</sup>と本墳に限られるところから、或いは地域性とも推測される。爺ヶ松古墳がその前方部がバチ形に開く点より古式に位置づけられていることを考慮すると、横立山経塚古墳は爺ヶ松古墳よりやや後出であるが、近い時期に位置づけられよう。さらに石棺を出土していない点も合わせると4世紀の第3四半期あたりであろうか。なお、爺ヶ松古墳との類似はこれだけではなく、古墳群の展開にも認められる。すなわち、爺ヶ松古墳に近接して積石前方後円墳ハカリゴーロ古墳<sup>⑦</sup>が分布するが、この関係を横立山経塚古墳と原経塚古墳間に求めることができるからである。備讃瀬戸の良港を臨む点まで一致してい

る。後でいう古式沿岸部古墳として類型化される一群に属する。

ところで横立山経塚と同型式の墳丘は、他に善通寺市野田院古墳<sup>⑧</sup>、丸山1号墳<sup>⑨</sup>、津田町鶴の部古墳<sup>⑩</sup>、大川町川東古墳<sup>⑪</sup>と、広域に散在するが、その位置が非常に重要である。つまり、野田院古墳は讃岐前期前方後円墳群の西端に位置し、川東古墳は石棺の出土が伝えられる白鳥町の大日山古墳<sup>⑫</sup>を除くと、東端に位置するのである。この2つの古墳は、石棺出現以前の讃岐前方後円墳分布域の東西を限っているのである。又、その内部にあって、爺ヶ松古墳は丸亀平野と坂出平野の結節点、金山・城山の峠に位置し、鶴の部古墳は津田湾東端の鶴の部半島の基部（当時湾内の小島）に位置するという様に、交通の要衝を占めているのである。以上を要約すると、これら独特の墳丘型式をとる古墳は特定の政治勢力の存在を示し、その分布はその範囲を示すことが推定されるのである。それは、原讃岐国とでも呼び得るまとまりである。

したがって、横立山経塚に関係する豪族達はその一翼を荷う勢力であったことが推定されるのであり、さらに重要なことは、畿内政権の瀬戸内海掌握と地域豪族勢力の抵抗という政治的基調にあって、本地域が畿内、讃岐両勢力にとって非常に重要な地域であったことが推測されるのである。この点は、埴輪出土にみる、讃岐の雄一石清尾山積石塚群との共通性にも認められる。

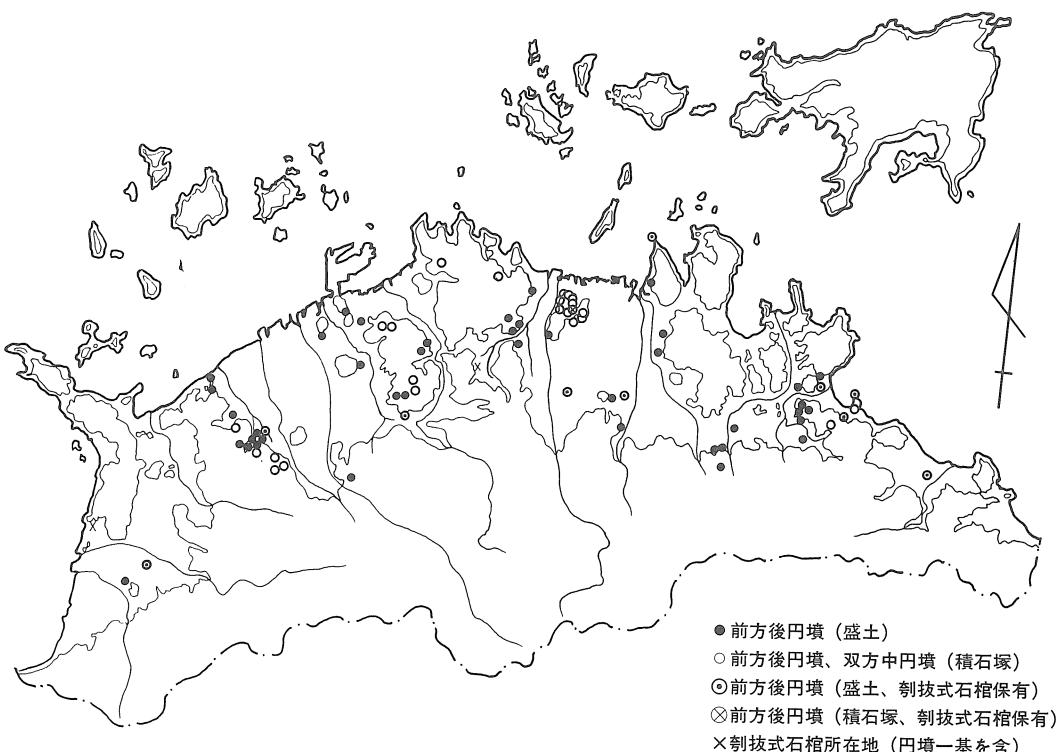
ところが、生島湾を臨むこの地区の古墳築造は2代で終焉した。前後して出現したのがかしが谷古墳群と推測される。勝賀山東麓、本津川、香東川下流域に広がる沖積地を臨む尾根先端近くに立地している。前期末のことであろう。その編年は、2号墳の堅穴式石室は前期の積み方を踏襲するが小型であること、弥生時代墳丘墓の伝統である外護列石を設けること、2号墳に後続する3号墳1号石室から直刀鎌が出土したことから推測される。一方、隣接して全長60.5mの盛土前方後円墳、今岡古墳が同様の立地を見せる。この古墳は、前方部から組合わせ空心埠長持形陶棺が出土したことで著名であるが、必ずしも年代が明らかであるとは言い難い。ただ、この陶棺が長持形石棺に似ていること、前方部の埋葬施設に堅穴式石室を用いていないこと、円筒埴輪、器材埴輪が墳丘各所から出土しているが、その円筒埴輪は川西編年畿内III期に相当する<sup>⑬</sup>ことから、5世紀前半、それも早い時期が想定されている。

したがって、かしが谷古墳群と今岡古墳群は連続して築造、もしくは一部重複の可能性が大きい。これより本地域の該期の古墳群の展開を求めるに、小型円墳群から前方後円墳への変遷、もしくは、小型円墳と前方後円墳の併行関係が想定されるのである。これを他地域で検討すると、東では津田湾の岩崎山古墳群<sup>⑭</sup>が類列として挙げられる。5基の古墳が津田湾を臨む岩崎山の尾根上に築造されている。1～3、5号が小型円墳もしくはそれと推測されるものであり、残りの4号が盛土前方後円墳で尾根先端に立地する。4号墳の後円部の小型堅穴式石室から石棺1基が出土している。石棺は特殊な形態の上陶棺のタガに類するものが浮彫されており、今

岡古墳陶棺との様式上の共通性も指摘できる。4号墳には石棺や副葬品から4世紀末の年代が与えられている。又、石釧、車輪石等の副葬品が知られ、畿内政権との密接な関係も想定される。一方、今岡古墳は後円部埋葬施設、及び副葬品の内容が不明であり、その性格を明らかにすることは困難であるが、出土陶棺が畿内と讃岐の石棺の交流によって生み出されたものと推測される上、積石塚伝統地域の中に築造された盛土前方後円墳という位置づけは、この古墳も又畿内政権と密接な関係をもっていたことを推定させるものである。以上より、これら2つの古墳群は群構成はもとより、主墳の性格も近いことが明らかである。

西方に転ずると、多度津町の黒藤山古墳<sup>15)</sup>が挙げられる。多度津沿岸部を眼下に収める黒藤山の山頂から東に延びる尾根上に1～3号の小型円墳とその先に全長30mの盛土前方後円墳、4号、箱式石棺、5号が分布する。4号墳は内容が明らかでないが、墳丘形態から前期に位置づけられている。

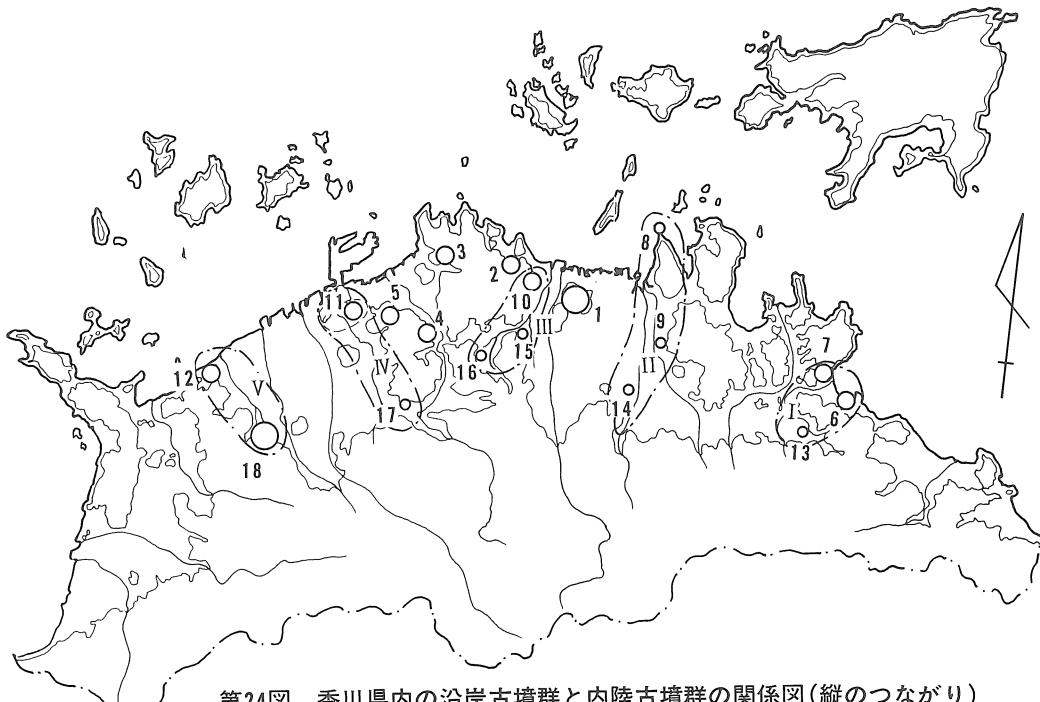
近接するものとして、五色台西北部山腹のすべり山、経の田尾古墳<sup>16)</sup>がある。全て積石塚で、すべり山古墳群は急斜面に1・3号の円墳と、2号の方墳が連接する様に築造され、その先に全長31mの前方後円墳と推測される経の田尾古墳が分布する。すべり山古墳群は積石塚であること、石室の形態、構築法から前期に位置づけられ、経の田尾古墳は、崩壊はなはだしく、内容は不明であるが、積石塚ということより、一連のものとして扱われている。



第23図 香川県内の主要前方後円墳分布図

以上、かしが谷・今岡古墳群に類するものを挙げると、全て前期、もしくは前期から中期初頭の古墳群であり、その上沿岸部に位置することがわかる。この要因には当然のことながら、特定の政治的・社会的状況を想定し得るが、それは又、かしが谷・今岡古墳の性格を規定するものである。よって次に少しこの点について検討する。

県下の沿岸部古墳には二種があり、一種は前期の早い段階から始まるもので、石清尾山古墳群、タイバイ山<sup>⑦</sup>・白砂古墳群<sup>⑧</sup>が属する。少し遅れるが、爺ヶ松・ハカリゴーロ古墳群、横立山経塚・原経塚古墳群がこれに入る。これらはタイバイ山・白砂古墳群を除く全てが積石塚である点、非常に土着的性格をもつ。今一種は前期末に中心を置く古墳群で、津田湾、宇多津、多度津の古墳群が属する。やや早いものだが高松市茶臼山古墳<sup>⑨</sup>もこれに入る。かしが谷・今岡古墳もこれに入る。この種の特徴は、その殆んどが内陸部の前方後円墳群と河川によって連絡されていることである。かしが谷、今岡古墳群には本津川中流の全長30mの前方後円墳、御厩天神社古墳<sup>⑩</sup>が対応するかもしれない。しかし、内陸部の前方後円墳が相対的に大型である点を考えると、或いは上流の石舟天神社の県下最大級の石棺<sup>⑪</sup>を出した古墳が相応しい様にも思える。勝賀山の南、袋山の袋山、布掛、相越各前方後円墳は実体が不明である。又、岩崎山4号墳、高松市茶臼山古墳、今岡古墳等がそうである様に畿内的色彩を濃く帯びた古墳が認



第24図 香川県内の沿岸古墳群と内陸古墳群の関係図(縦のつながり)

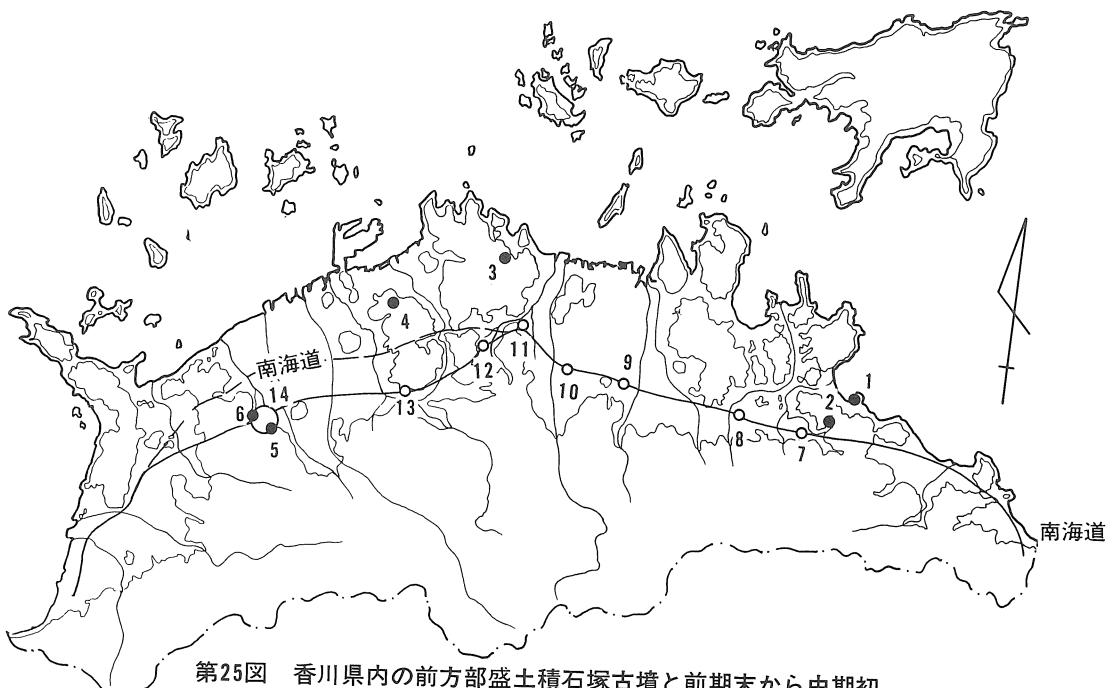
A 古式沿岸部古墳群	B 新沿岸部古墳群	C 内陸部古墳群	BとCの関係
1. 石清尾山積石塚古墳群	6. 津田湾南部古墳群	13. 富田茶臼山古墳	I 津田川系(6, 7, 13)
2. 横立山経塚・原経塚古墳群	7. 津田湾北部古墳群	14. 三谷石舟古墳	II 春日川・新川系(8, 9, 14)
3. 経ノ田尾・すべり山古墳群	8. 長崎鼻古墳	15. 御厩天神社古墳	III 本津川系(10, 15, 16)
4. タイバイ山・白砂古墳群	9. 高松市茶臼山古墳	16. 石舟天神社石棺	IV 大東川系(11, 17)
5. 爺ヶ松・ハカリゴーロ古墳群	10. 今岡・かしが谷古墳群	17. 快天山古墳	V 弘田川系(12, 18)
	11. 宇多津古墳群	18. 善通寺古墳群	
	12. 多度津古墳群		

められるのもこの種の特徴の一つである。

この様な沿岸部古墳の二種は出現時期の差によって把えられたものであるが、瀬戸内海を舞台として展開した前期の政治・社会の二つの画期を表徵するものである。

第一の画期は古墳時代の開始期—畿内政権を核とした瀬戸内新体制の開始期—畿内政権の沿岸部、内陸部双方の勢力との個別的交渉による支配ネットワークの構築、第二の画期は地域勢力の政治的統合の伸長と畿内政権の支配体制強化という相矛盾する政治課題の衝突・調整、という特色を持つ。第二の画期にあって、畿内政権は沿岸部古墳群間の横の繋がり—海岸線グループ、又沿岸部古墳群と内陸部古墳群の縦の繋がり—河川グループ、内陸部古墳群間の横の繋がり—内陸部グループを分断することによって支配権の拡大・強化を計ったことが想定されるのである。石棺に観察される畿内勢力と讃岐勢力の交流もこの新しい政治状況に基づくところと推察されるが、この状況が展開されて始めて、かしが谷・今岡古墳群の出現経緯と内容が意味のあるものとなるのである。

すなわち、高松平野の沿岸部古墳として、西から横立山経塚・原経塚古墳群、かしが谷・今岡古墳群、石清尾山古墳群、高松市茶臼山古墳・長崎鼻古墳<sup>②</sup>、が知られるが、横立山経塚・原経塚古墳群と石清尾山古墳群は上述した様に積石塚である以上に共通点を持ち、一方かしが



第25図 香川県内の前方部盛土積石塚古墳と前期末から中期初頭の主要古墳分布図（横のつながり）

- |    |            |     |                |                 |
|----|------------|-----|----------------|-----------------|
| A  | 前方部盛土積石塚古墳 | B   | 前期末から中期初頭の主要古墳 | 実線はBをつないだもの     |
| 1. | 鶴の部古墳      | 7.  | 富田茶臼山古墳        | ほぼ、南海道に一致するが11、 |
| 2. | 川東古墳       | 8.  | 大宮古墳           | 12以西で少し南による     |
| 3. | 横立山経塚古墳    | 9.  | 三谷石舟古墳         |                 |
| 4. | 爺ヶ松古墳      | 10. | 船岡山古墳          |                 |
| 5. | 丸山1号墳      | 11. | 御厨天神社古墳        |                 |
| 6. | 野田院古墳      | 12. | 石舟天神社古墳        |                 |
|    |            | 13. | 快天山古墳          |                 |
|    |            | 14. | 磨臼山古墳ほか善通寺古墳群  |                 |

谷・今岡古墳群と高松市茶臼山古墳も一つにまとまる。よって、性格を異にする古墳群が交互に分布することになる。図式的には、讃岐的・畿内的・讃岐的・畿内的と表すことができる。この分布状況からかしが谷・今岡古墳群と高松市茶臼山古墳の勢力は、沿岸部古墳勢力の分断、特に讃岐の雄－石清尾山積石塚古墳群勢力の牽制を目的とする畿内政権の梃子入れによって勃興した勢力であることがわかるのである。かしが谷古墳群の様な径20mに満たない小型円墳しか築造されなかつた地域に60mを越える前方後円墳・今岡古墳が築造された理由、これら古墳群が西隣する横立山経塚・原経塚古墳群と何らの連絡も認められない理由の多くは、この新政治基調に求められるのである。

この戦略が功を奏してか、石清尾山積石塚古墳群は中期前葉でその築造を終える。しかしこれはただ一人石清尾山積石塚古墳群に起こった現象ではなく、それに前後して善通寺地域より東の各地前方後円墳群に共通するのである。およそ中期中頃までには当該地域の前方後円墳の大規模を誇ることである。大川町富田茶臼山古墳（約145m）<sup>23</sup>、長尾町大宮古墳（100m以上）、高松市三谷石舟古墳（約90m）<sup>24</sup>、綾南町快天山古墳（約100m）<sup>25</sup>等がそれである。そこに各地勢力の政治的・経済的成长の跡を認めることもできるが、その飛躍的な大規模化は、その上に畿内政権との間の増大する政治的・社会的緊張が新政治基調によって一挙に臨界点まで達し、より広い地域の豪族や、農民をも含めた広範な勢力の結集が計られた結果であろう。

なお、上記した内陸部の大型前方後円墳を結ぶラインは、律令期の南海道におおよそ重なる。実態は不明であるが、そこに古墳群に象徴される勢力のまとまりが想定されるのである。それは上述した原讃岐国の第2段階に位置づけられる。又、沿岸部古墳と内陸部古墳の河川を通じた繋がりは、弥生時代以来の伝統と推察し得るが、律令期の郡はこれの発展整備した形態であろう。この様に中期半ばまでに、律令期の政治的・社会的まとまりに類する程のものが、形成されるにもかかわらず、中期後半にはそれに逆行する古墳群の展開が認められる。

すなわち、善通寺以東各地に、径20～10mの中小円墳群<sup>26</sup>（寒川町大井七ツ塚、長尾町川上古墳、綾南町岡の御堂古墳群等）が形成されるのである。それは非常に地域的な堅穴式石室と、類似した副葬品（鉄製武具一式）を持つ古墳で、前代の大勢力の衰退したもの、前代から続くセカンドクラス、新興クラスの三通りの被葬者が想定されるが、鉄製武具の生産と流通、その墳丘形態と規模、堅穴式石室の地域性から、中期後半にあって讃岐にまとまつた勢力は無く、畿内政権が各地豪族を個別に直接支配してしまつたことが知られるのである。

なお、笠居郷には今までのところ、この種の古墳は知られていない。旧勢力は完全に絶たれ、新興勢力も未成長だったのであろうか。しかし、今岡古墳の東方、本津川の右岸、香東川の間に相作牛塚<sup>27</sup>が築造される。鉄剣、馬具、挂甲、円筒埴輪、家形・人物の形象埴輪が出土し

ている。典型的な該期の古墳であるが、時期は6世紀前半まで下がる様である。本津川を挟んで政治勢力の交替があったことも推察される。

次に当地域で古墳の築造が再開されるのは6世紀末である。型式も横穴式石室と一新され、分布も拡大されている。

勝賀山西麓に桑崎古墳、その北方串ノ山の南麓に彈正原古墳が分布するが、実体は不明である。

勝賀山の東麓、本津川、香東川によって開かれた沖積地に臨んで、北から沢池古墳、かしが谷4号墳、善師垣古墳群が知られる。さらに南方、神高池周辺に神高古墳群が分布する。これら後期後半横穴式石室墳群の内、内容がある程度判明しているのは神高古墳群だけである。よってこの古墳群を中心に当該期の古墳群の展開を検討する。

その立地をみると全て、山麓の深い谷間の斜面に築造され、その前面に桑崎古墳なら桑崎の集落が、弾正原古墳には弾正原集落が、神高古墳群は大きく2つに分かれ、平木1～3号墳と大塚には山口の集落が、古宮権現社古墳を中心とする古墳群には神高の集落が開ける。現代の各集落が何時から始まったのかは不明であるものの、古墳の被葬者の主たる活動舞台は、かかる集落を大きく越えない範囲であったことが推測される。さらにこの期に至って突如として出現した背景として、古墳の立地する谷の開発が進展し、それによって経済的・社会的地位の向上を果たした人々が多数生み出された状況が想定できるのである。よって被葬者は開発領主の性格を強く持った人物であるといえるが、石室型式からして、各墳には彼を家長とする村落の有力家族が納められたとされる。彼らは村落の上層部を形成していたと推察されるが、神高古墳群の構成から上層部の社会的構成を検討する。

神高古墳群は現在9基の古墳が知られるが、大きく2グループに分けられる。北の平木1号墳グループと南の古宮権現社古墳グループである。平木1号グループは谷奥部に平木1～3号墳が集中し、先端近くに大塚古墳が1基分布する。玄門平面形は全て突出形<sup>⑧</sup>を呈し共通するが、規模に大、中、小の別があり、大が平木1号、大塚古墳（5m台）、中が平木3号（4m弱）、小が平木1号（3m強）となっている。築造・使用期は、平木1号が6世紀末から7世紀前葉、平木2号が7世紀前葉である他は不明である。以上の各墳の情報から平木1号グループの構成を検討すると、グループは大きく2つに分かれ、各々に大クラスの一基が中核として存在する。大塚古墳と組になる中・小墳は現在不明であるが、平木1～3号墳では、1号と2号が隣接して3号に対峙するところから、1・2号と3号の構成となる。ところが平木1号と2号は築造期が前後し、1号から2号への変遷が想定されるから、1号と3号、或いは2号と3号の2基構成になる。この2基は以上述べたところから上位と下位の関係を有する。以上を要約するに、平木1号グループは2つの有力集団からなり、各集団は1つ以上の有力家族か、

2つ以上の場合は上・下の関係を保有する複数の有力家族から構成されていたと推定される。

なお、2つの有力集団の上・下関係は不明である。

転じて、古宮権現社古墳グループの構成を検討すると、ここでは谷奥部に山野塚古墳、中央部に古宮権現社古墳、先端近くに神高池古墳群と大きく3つに分かれる。山野塚は玄室長5.75mで平木1号グループの平木1号墳、大塚と対比されるが、規模はそれを上回る。神高池古墳群は殆んどが崩壊している為その実体は不明であるが、おそらく平木1～3号墳と同様の群構成を展開したものと推察される。問題は古宮権現社古墳で、玄室長6.14mと上述の大・中・小の区分を大きく越え、古宮権現社古墳グループだけでなく、神高古墳群全体に卓越する。又、同墳からは鉄地金銅張りの鞍飾りや、大型金環、自然釉豊かな須恵器の優品が出土し、規模だけでなく副葬品からも被葬者の卓越性が認められている。さらに、玄門平面形も中間形で、山野塚が羽板形であるのと共に突出形の他墳と異なっている。これら全ての要素が古宮権現社古墳の卓越性を証明するものであり、古墳群中の主墳としての位置を際だたせている。なお、玄門梁石に連接する玄門第1天井石は一段低く、あたかも廂の観を呈するが、類例が大川町八剣古墳<sup>⑨</sup>、坂出市綾織塚古墳<sup>⑩</sup>、新宮古墳<sup>⑪</sup>、大野原町椀貸塚古墳<sup>⑫</sup>と各地の主墳クラスに知られる。これも又古宮権現社古墳の卓越性を示すものであるが、各地の主墳クラスがそれを採用しているところをみると、その卓越性は神高古墳群中の他墳との比較の上で、言い換えれば、神高古墳群の中にあって付与された性質という限定条件を必要とするものである。

以上より、神高古墳群の構成とそこから推定される被葬者達の社会構成を検討すると、神高古墳群は平木1号墳と古宮権現社古墳を主墳とする2つの大グループからなる。このグループはおそらく村を単位としたものであろう。そして大グループは2～3つの小グループから形成され、小グループは1～3基程度の古墳から形成されている。各墳は家族墓と規定され、血縁関係の濃度が築造空間の遠近を決定することを前提にすると、小グループは同一血縁団から構成されていたと推測される。各墳の被葬者は村内の有力家族とされるが、とりわけ古宮権現社古墳の被葬者は際立っており、それら有力家族の盟主として、2つ或いはそれ以上の村落を統括する立場にあったことが知られるのである。しかし、彼の統括する範囲は狭く、前期、中期の前方後円墳被葬者と比較にならないことは、上述した様にその墓制にみる卓越性の限界より明らかである。

以上が、笠居郷の後期後半の古墳群の展開と、推測される社会の構成である。しかし、後の笠居郷に比定されるこの地域が、当時の讃岐全体からみてどの様に位置づけられるのであろうか。次にこの地域性について少し検討しておこう。

神高古墳群の一般的な玄門平面形は突出形であったが、これは坂出平野周辺と共に、玄門平面形からすると、坂出と神高地区の古墳群は1群を形成することになる。ところが、奈良・

平安時代の文献には、坂出と高松西部に綾氏が居住していたとの記載がある<sup>⑩</sup>。この2つの資料をつき合わせれば、先の古墳群のまとまりは、実に綾一族の先祖を示すものではなかつたかと考えられるのである。そして重要なことは、これを認めれば、後に綾氏と呼ばれる氏族（原綾氏）の実体が想定されることである。すなわち、原綾氏なる一氏族は、数系列に分かれ、各々の村の有力集團として集住していたといえよう。神高古墳群の被葬者は、さしづめ原笠居綾氏とでも呼び得ようか。

その後律令期には、綾氏の住地に国庁がひらかれ、国分寺が建立される。この地域は讃岐の政治・経済・文化の中心として、最も重要な土地となった。この地域の変遷に、笠居郷の綾氏が如何に働いたか、これは今後明らかにしなければならない重要な課題である。

## 注

- 1 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会「香川の前期古墳」 1983年
- 2 森下浩行「香川考古」創刊号 1983年
- 3 高松市文化協会「文化高松」第6号 1984年
- 4 注1と同じ  
川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 1978年
- 5 注1と同じ
- 6 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」 1933年  
高松市教育委員会「鶴尾神社4号墳調査報告書」 1983年
- 7 注1と同じ
- 8 注1と同じ
- 9 注1と同じ
- 10 注1と同じ
- 11 注1と同じ
- 12 注1と同じ
- 13 注4と同じ
- 14 注1と同じ
- 15 注1と同じ
- 16 注1と同じ
- 17 注1と同じ
- 18 香川県教育委員会「新編香川叢書」考古篇 1983
- 19 注1と同じ
- 20 徳島県博物館・徳島考古学研究グループ「シンポジウム四国の前方後円墳」 1980年
- 21 藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」「倉敷考古館研究集報」第12号 1976年
- 22 注18と同じ
- 23 注18と同じ
- 24 注18と同じ
- 25 注1と同じ

- 26 丹羽佑一「讃岐中期円墳の研究」「香川史学」第14号 1985年
- 27 高松市文化協会「文化高松」第6号 1984年
- 28 玄室と羨道の壁面が一体に近く玄門袖石がいずれからも突き出されている形。なお、「羽子板形」は玄室と羨道の壁面が区分され玄門袖石が羨道壁面と一体となる形、「中間形」は玄室と羨道の壁面が区分され玄門袖石ががいずれも突き出ている形をいう。注3文献参照
- 29 引田町教育委員会「川北1号墳」 1985年
- 30 注29に同じ
- 31 注18、29に同じ
- 32 注18、29に同じ
- 33 「続日本紀」延暦10年9月20日  
「大政官符」天暦11年2月26日